

聞名仏教

第 136 号 毎月発行
(発行日) 2022 年 1 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/
振替 00930 (7) 146886

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

如来まします 佐々木蓮磨

私の檀家に、舟乗りを業として
している一人の同行がおりました。
いったい舟乗りというものは、
いつ波浪に呑まれて、一命を失うやも計
られぬといった、まことに
危ない生活を営んでいるた
め、すべての問題について
割合に執着がうすく、アツ
サリとした傾向があります。

ある日の法話に、私が次の
ような清沢満之先生の話
をしたことがあります。
それは先生に向かつて奥さま
が「明日炊く米がないが、
どうしましょうか・・・」
と、困った様子で尋ねられ
たところ、先生は言下に「心
配する必要はない、如来さ
まがましますから」と力強
く答えられたという話であ
ります。ところが一般の参
詣人は何だか合点のゆかぬ
ような顔つきでありました
が、今の同行一人は思わず
手を打って「そこだ」とニ
ッコリ笑って念仏しました。

全くの即便微笑であります。
ちよつと聞くと、不審の
起るのがむしろ当然だと思
います。「明日炊く米がない」
という問いに対して「如来
がましますから心配する必
要がない」という返答は、
少し飛躍し過ぎていたので、
普通常識としては受けとり
難い言葉です。いかに清沢

先生にしても、明日炊く米
がない場合には、必ず近所
へ借りに行くか、知人の所
へ分けてもらいに行かれる
と思います。
もしそれをせずに、手を
こまねいて如来のお与えを
待っておられるようであら
ば、非常識というほかはあ
りません。先生が「如来が
ましますから心配するな」
と言われたのは、最後の腹
を決めておれば、何事によ
らず心配する必要がないと
いうことを、単刀直入に教
えられたものと思います。
この話を聞いて狂喜した

今の同行は、それ以来、全
く心機一転して、愚痴や不
足や、また泣きごとを言わ
ぬようになりました。その
うちに、彼は再起不能の難
病にかかって臥床の身とな
りましたが、信仰の変化は
ありませんでした。私は一
枚の紙に「如来まします万
事憂うる要なし」と書いて
送りました。彼は大層喜ん
で、いつも枕頭に貼りつけ
て念仏のよすがとしており
ました。遂に最後の日
やって来ました。

彼は死期の迫ったのを予
知して、近所に住んでいた
弟を呼び「どうも今日は往
生させてもらいそうにある
から、お仏壇にお灯明を上
げて、お勤めをしてくれ。
私は、そのお勤めの声を聞
きなから、往生させて頂く
から・・・」と落ちつき払
って頼むので、弟は驚いて
「そんなに悪いか・・・」
それでは死んで行く先きに

ついて、安心ができてい
るか」と聞いてみた。
すると、彼はニッコリと
笑って「如来さまにお任せ
した以上何の心配があるか」
と落ちついていたので、弟
はまた重ねて「では死んだ
後のことについて、言いの
こすことはないか」と尋ね
ると、これまた同様に「何
の心配があるか、如来さま
がましますのに」と言つて
安らかに念仏しております
ので、弟君も安心して仏壇
にお灯明をあげ、正信偈を
読んでいるうちに、彼は安
らかに往生の素懷を遂げた
のでありました。これはま
た、何というスッキリとし
た最後でしょうか。

他力信仰というものは、
昔から極難信といわれてい
るので、どうも一般にむつ
かしいものと思ひ込んでい
る傾向がありますが、実は
むつかしいどころか信ぜず
にはおられないいわれであ
ります。自己の真相が知ら
れてみれば、いかなる人
でも今の同行のように、聞く
下で信が得られるのであり
ます。

現代真宗問答①

た考えになつていいる人が多いですね」
A 「ええ、『私は無神論者だ』と云つて憚はばか

念仏を信じて助かりなさい。それでなければいつまでも流転しますよ、といった教えです」

どを問うたのではなく、真宗の教えを前にして『自己とは何ぞや』というもつとも身近な根元的な問いを問うたのです。神も仏もあるものか、と云つていいる人についていえば、そういうことを言つていいるあなた自身は何物か、あなたは何によつて生きていいるのか、と問うたといえるでしょう」

A 「最近、宗教離れ、仏教離れ、寺離れとよくいわれますね。ということは真宗の信者は減少して来ているのですね」

育でも基礎は自然科学的な教育です。決して宗教的な世界観を学校（公立）では教えませんから。特に日本では宗教教育は家庭で行いなさいということなので

らない人がいます。ろくに宗教や仏教を学びもしないで。このような現代の人に真宗の教えを説くのは難しいのですね」

A 「私にとつてはこれは大変有難いのですが、一般人は何か空想的な作り話のように思つたり、自分には関係ないと受け取る人が多いのですね」

A 「自己とは何かという問いは全ての人の関係がありますし、また根源的な問いですね。阿弥陀仏がましますかどうかの問いは拒絶し得ても、『あなたはそもそも何物か』という問いは否定しえませぬね」

D 「ええそうです。これは1世紀からと言うよりは、2世紀になつてからの傾向です。宗教離れということではキリスト教も同じです。少なくとも先進国では」

しょうが、実際は殆ど行われていません」
A 「ところで科学的な見方が宗教（真宗）にどういう影響を与えているのですか」

D 「従来の真宗のお説教のような説き方ではなかなか対応できなくなつていいると思ひます。もちろん従来の伝統的な教えに素直に信順する幸せな人もいますが、そういう人は少ないです」

D 「実はこういう近代に於て、人間の問題を正面から取り上げ、そこから真宗（仏教）に道を付けてくださつた先覚者がいます」

D 「自己とは何かという問いは生と死の極限状態の中で、答えを見出されたのです」
A 「極限状態の中でというのは」

D 「原因はいくつもあるでしょう。生活が豊かになつたとか、医療が充実してきたとか、娯樂が増えたとか、いろいろあると思ひます。しかし、一番大きな原因は自然科学の発達により、自然科学的な物の見方が主流になつたからだと思ひます。自然科学的な見方は物質の世界を中心にした見方ですから、おのずと唯物論的な見方になつてしま

りませんか」
D 「直裁に言えば『神も仏もあるものか』という思ひです。この世界の何処を見渡しても、真宗で説く阿弥陀仏らしきものも確認できないし、極樂も地獄も確認できない。あるのは人間を

A 「従来の真宗の教えとはどのようなものですか」
D 「それは真宗の根本經典である大無量寿經に説かれていいるように説くというこ

D 「明治時代に出られた真宗大谷派の清沢満之師です」
A 「清沢師はどう仰るので

D 「清沢師はご自身が、當時死に病いといわれた結核にかかり、奥さんを亡くし、長男を亡くすという不幸の

まいます」
A 「そうですね、学校の教

いほ漠然ではあるがこうし

うと願ひ、その願ひを成就して阿弥陀仏になり浄土を開いて、本願の名号を衆生に与えて信じさせて救ひ、浄土に生まれさせて自利利他円満の仏にしてくださる。それゆえお念仏を申し、お

D 「清沢師は、ご自分を近代人の一人として問いを起こしたのです。清沢師は、阿弥陀仏がましますかどうか、極樂浄土があるかないか、地獄があるかないかな

A 「では、その答えとは」

いほ漠然ではあるがこうし

いほ漠然ではあるがこうし

いほ漠然ではあるがこうし

いほ漠然ではあるがこうし

いほ漠然ではあるがこうし

D 「答えを師は、次のように表されました。

『自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾にこの現前の境遇に落在せるもの、即ち是なり』と」

A 「どういう意味ですか」

D 「ここでは詳しくは申せませんが、要するに、絶対無限のいのちの用きによって、今今とここにあらしめられて在る一個の存在、これが自己だといわれるのです」

A 「このお言葉からどういうことが教えられますか」
D 「本当の自己は今ここにしかなく、しかも絶対無限の妙なる用きによって存在し、絶対無限の中に在り、絶対無限の妙用の外に自己の存在は無いということですよ」

A 「もう少し具体的に話してください」

D 「ごく身近なところで言いますと、身体も身体の中の血液も細胞も心臓も胃腸も私たちが作ったものではなくて、我ならざるものであり用きです。この身体を

維持する空気も食物も衣服も水も私の作った物ではなく我ならざる用きです。身体を支えている地球も、また太陽の光も我ならざる用きです。この地球もこの大宇宙を離れては存在し得ません。そうすると私という

一存在は我ならざる無量無数の用きにおいて存在し得ます。而も全体が私の思いや力を超えていて、しかも常に変化しつづありませぬ。身体だけではありませぬ。一瞬一瞬の心の移り変わりも私の力ではありませぬ。また私の心も私が造った物ではありませぬ。心が無ければ何も分かりませぬ。靈妙不思議な心がなければ人生も何もありません」

A 「そうですね、心は知る働きですから、心の働きがなければ世界も身体も、親も子もわかりませぬ。不思議な心も私が作ったものではないですか」

D 「しかも心は一瞬一瞬変化していますね。それに関して清沢師はこういっています。

『現前一念における心の起

滅、亦自在なるものにあらず。我等は絶対的に他力の掌中に在るものなり。』

と。心は一瞬一瞬変化しますが心のひと思いの生滅も私の自由にはならない、それは我ならざる用きよってであつて、私は無限な用きの手の中にいる、そのような存在だと」

A 「そうすると私の全体が我ならざる用きに於てあり、いわば絶対無限の妙用の外にはないのですね」

D 「ええそうです。我ならざる無量無数の用きを統合して〈絶対無限の妙用〉と清沢師は言われますが、その後この用きを『無限の能力』とも言います。『如来』とも言っています」

A 「伝統的な真宗の教では如来のことを阿弥陀仏といいますが、阿弥陀仏とは違うのですか」

D 「阿弥陀仏のことです。清沢師は如来のことを

『第一の点より云へば、如来は私に対する無限の慈悲である。第二の点より云へば、如来は私に対する無限の智慧である。第三の点よ

り云へば、如来は私に対する無限の能力である』

と言っています。なお宗祖は阿弥陀仏（如来）の用きを

寿命延長、よく量ること

なし。（寿命の無量）

慈悲深遠にして虚空のご

とし、（慈悲の無量）

智慧円満にして巨海のご

とし。（智慧の無量）

と仰せられ、寿命の無量と慈悲の無量と智慧の無量で表されています」

A 「それを清沢師の対応しますと、慈悲と智慧は同じですが、清沢師は、宗祖が〈寿命無量〉といわれたのを無限の能力と表されたところに違いがありますね」

D 「ええ、量りないのちを無限の能力と言われて、いのち用きを能力と表されたのですが、内容は同じですね。ただ能力と表されることによつて、現代的な意味があると思います」

A 「どういう意味ですか」

D 「科学の対象は基本的にはすべてエネルギーに關す

ることです。エネルギーは能力とも言えます。ですから如来を能力で表すと自然科学の領域をも含む意味が出てきます」

A 「そのことはどんな意味がありますか」

D 「例えば一つの物はエネルギーが形を取った姿です。私たちの身体もエネルギーが形を取った物です。ですから私たちの身体という物質的存在は限りない能力であるエネルギーが形を取った物と言えます。そういう能力の取った形が私の身体ですから、無限の能力と言われる寿命無量（阿弥陀仏）の用きに物質の用きも収まるといえましよう」

A 「寿命無量の領域の中に物質的自然を含むことができるのですね」

D 「ええそうです。以上のように、（私は仏（如来）など信じられない）と言っている人そのものが、如来無しには一瞬も存在しえない、そのことに気づいてほしいですね」

信心夜話

念仏とは、「仏様が私を念じて下さってある心を念仏という」と聞きながら、聞きもせず、なお且つ、私が仏様と念ずる所作とするから、思うから念仏おとしている時、忘れていた時、「こんな事では」と不安が出る。

一声も自分が称えた念仏は、ただの一声も無いのに、自分の所作とする。念仏おとしていた、忘れていたと思う。思い出す思いまで仏様から「念」わされる「念」であるのに、私の思いにする。

長くつづく、いやな思いのするのは念仏に照らしい出された私の悪業。かかる身をとひざまずく時、本願にたち帰る。たち帰らされて南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 御恩の重きこと深きこと、おして知るべし。

(「松並松五郎念仏語録」より)

* *

以下、この松並さんの言葉を読んで、感じたことを少し述べてみます。

松並松五郎様は、18才の時、滋賀県の大谷派の住職だった森師から、難波別院での師の法話の中で、親鸞聖人の言葉である

「弥陀の本願ともうすは、名号をとえんものをば極楽へむかえんとちかわせたまいたるをふかく信じて、となうるがめでたきことにてせうろうなり。信心ありとも、名号をとえざらんは、詮なくせうろう。」

を聞いて、すぐに念仏申すようになり、生涯かけて念仏相続の生活をされました。松並さんの教えに対する素直さには感嘆します。

普通は「念仏申しなさい」と言われても（我が強い）からなかなか素直になれません。後世、妙好人として仰がれる人は何と言っても教えに対して素直に随う姿

勢が顕著です。

念仏は私が仏を念じるのではない。阿弥陀仏が私を「助けたい、助けずにはおかない、如何にしても信じさせたい」と常に私を念じづめのお心が念仏。その仏様の念じ心がやつと私に届いて念仏を今称え聞かせていただいているのです。

念仏を忘れていることに気がついて、「こんなことではいかん」と不安に思うのは、自分が念仏しているように思うからであると言われる。私が念仏しているという考えがあるから、「こんなことでは」と思うのだと指摘されているのです。

本当はただの一声も自分から出たものではない。阿弥陀仏が私において称えて下さるから、称えられているのです。

松並さんがよく「称えて下さる称えましょ」と言われる。阿弥陀仏が私において称えて下さるから、お念仏が私の口から出て下さる

のであると、なんとまあ。

「ああ念仏を忘れていた」とふつと念う思いが起る。そのように思い出すまでが阿弥陀仏から思わせて下さったのであると。松並さんがどれほどお念仏一つに生涯を定めておられたかが、ここからも感じられます。

松並さんのお念仏を「自力の念仏だ」などと非難する人があるかも知れないが、そんな非難など、実際の松並さんに接したら、恥ずかしくて逃げ出すと思う。

松並さんに合ってみると、松並さんが阿弥陀仏と常に一緒という濃厚な親近感で生活しておられることに圧倒されます。松並さんの歌に、

よほどアミダさんは
私にほれた
日毎夜毎に会いに来る
ナムアミダナムアミダ

一人称えて一人で聞いた
母と二人の声がする
ナムアミダナムアミダ

とあります。有難い歌です。

念仏を称え続けていると、イヤになるときがある。それは自分の悪業のためであると、知らされて、慚愧し、本願にまた帰り、ご恩を知らされるといふ、松並さんは慚愧と仏法讃仰の生活でした。

松並さんの様にはとてもなれませんが、少しづつでもちかづきたいものです。

(了)

謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

土井紀明 中川政二
土井眞由実 宮野勲
吉田徳子 足立美明

令和四年元旦